

KSKQ

イマージュ

2019年1月

第29回下北沢演劇祭参加
金満里ソロ公演

ウリ・オモニ

監修 大野一雄
振付 大野慶人

2月8日(金)～11日(月祝)

下北沢 ザ・スズナリ

우리 어머니



母からの魂の継承を象徴的な舞いに込めた、不朽の名作。

20年ぶり東京にて 待望の再演

1991年9月3日 第三種郵便物承認

毎月(1・2・3・4・5・6・7・8の日)発行

우리 어머니

2019年 初春のお慶びを申し上げます。

2018年劇団態変では、7月にアトリエ公演『あの日から、ずっと...』を、11月には東京 座・高円寺にて『ニライカナイ-命の分水嶺』を上演しました。

『あの日から、ずっと...』は、2012年『一世一代福森慶之介 又、何処かで』の続編のようであり、アンサーソングのような舞台に昇華した作品でありました。

『ニライカナイ-命の分水嶺』では、再演でもありながら、相模原障害者大虐殺事件から2年という月日を経て、風化しようとする世間の流れに、一石を投じる作品です。

東京では800余名のお客様に足を運んで頂き、現在の空気に呑み込まれない劇団態変の在り方を改めて示せたのではないかと考えています。

2019年金満里ソロ公演『ウリ・オモニ』を、東京では小劇場界のメッカである、ザ・ズナリで上演します。

さらに、態変にとっては関西でなじみの深いアイ・ホールでの公演を6月に控えています。

2018年にご声援・ご協力を頂いた皆様に御礼申し上げますとともに、2019年の劇団態変をさらに注視いただければ幸いです。

劇団態変一同
2019年1月



母を越え 金満里

20年が過ぎた。

母、金紅珠（キム・ホンジュ）が亡くなったのと、この作品が私のソロ一作目としてこの世に出たのと。

『ウリ・オモニ』は、亡くすものと生まれるものが、交差する点にあるそんな作品だ。

そして20年後、私の中から母は遠くなり、芸術家としての金紅珠がそこにいる。

思えば、ジェンダーの問題として言われる、母娘問題、にそっくり当てはまる私と母の関係性だった。

韓国の古典芸術家の大家として、母というよりも'金紅珠'のその存在は、家族の中でも絶対的存在だった。その金紅珠の私生児として、9人の子供の男親である前夫を亡くした後、10人目として男親の違う子として母はおそらく初めて、自分の意志、でこの世に私を産み落とした。

そのようにして生まれた私は、他の兄弟とは格段に違う扱いで、母の溺愛を受け絶大な庇護のもと育てられた。その末娘が、幼児で踊りに秀でていたので「これは自分の芸と名前を継ぐ跡取りに」と自他共に認めていた矢先、ポリオウイルス罹患で全身小児麻痺の重度身障児となった。

母娘問題、は、女が歴史的に受けてきた、人間扱いされなかった差別・抑圧、それを又女が母となり自分の娘にその代償のように、娘に依存し娘も母に依存し一個の人格としての自立を奪う、相互依存関係を母親が作ってしまうという、女性差別の所産である。

母は、韓国の古い時代の儒教精神で父に従い夫に従いの、芸術家として、日本へ夫に連れて来られ芸を披露し、率いた劇団の看板女優として全団員とその家族を食わせる存在を担わされた。が、自分の意志で自分の人生を決めた結果ではなかった。

そこに私生児としての私が娘として、母と対立し反対を押し切って母の手元から去り、障害者として家出をする。そんな母は阻みきれない娘の道理を、母娘関係という負の連鎖を断ち切るには、自国の朝鮮半島が日帝支配時代の酷い圧政に抗して起こった朝鮮独立運動、それと娘のやろうとする障害者解放運動は同質だと理解に至ったからだ。

言いかえれば、私が重度の身障者になった、そこから、女の負の連鎖を転換でき母とは180度異なるアバンギャルドな身障者の身体表現を生み出す、といった女と障害者を捕らえてきた二重の楔（くさび）を断ち切れた。相模原やまゆり園19名障害者を殺した犯人の持つ優生思想とは、全く逆の、障害の必然的価値、がここにはある形で。

そのことを伝えられる20年目として、私は、再び母に会いに行ける。

우리 어머니



『ウリ・オモニ』 作品について

1998年3月に86歳で他界した金満里の母、金紅珠（キム・ホンジュ）は、韓国古典の歌、舞、楽器に秀で「至宝」と呼ばれた芸人であり、流転の運命を背負い日本への移住を余儀なくされながら、しかし、母国を侵略したその国にあって、民族の魂の芸能を、戦時中にさえも上演し続けた気骨の人でした。今回、本作によって、金満里は、母の古典芸能のスピリットを、自ら創造してきた態変の身体表現に取り込んでみようとしています。

さて、本作は、舞踏の大野一雄氏・大野慶人氏の監修を受けて創り上げました。大野一雄氏の代表作に「わたしのお母さん」がありますが、「女の側からの『わたしのお母さん』を創りましょう」ということで、監修を快諾していただきました。魂の舞踏家・大野一雄氏の世界観、「子宮」と「宇宙」が一体となっていくというビジョン、が盛り込まれて一層深い意味付けをいただきました。

すなわち、この作品において、3つのファクターが出会っているのです。金満里の独創が身障者の身体から取り出した特異な表現力と、韓国古典芸能の魂、そして大野一雄の舞踏の世界観が。

金紅珠（キム・ホンジュ）とは

1911年韓国釜山の生まれ。6歳で初舞台を踏んで以来、韓国全土で天才と呼ばれた芸人。古典芸能全般をこなしたが、特に僧舞（スナム）には他の追随を許さぬものがあったという。1935年に日本への移住を余儀なくされたが、間もなく「金紅珠一座」を結成。日本人、韓国人の別なく人気を博した。戦後間もなくマネージャーをしていた夫の死去により、一座は解散。金紅珠古典芸術研究所を開き民族芸能の普及に努めた。戦後すぐの日本の地で、大阪と東京を往来しその芸を学んだ弟子の数は計り知れず、又、朝鮮最後の李王朝継承者であった李垠殿下と李方子女史も金紅珠の伽耶琴と唄を傾聴したことがあった。初代在日本韓国国楽芸術協会理事長。だが、名前を継ぐことを望んだ未婚は重度の身障者となり、その後名前を継ぐ弟子にも恵まれず、自分の芸の小手先の真似をされることを嫌うゆえにレコード吹込みも拒み、ひっそりと晩年を過ごし1998年に86歳で他界する。

金紅珠（キム・ホンジュ）年譜

1911年	釜山に生まれる。
	父親は朝鮮の笛を吹く芸人であった。紅珠の数え14歳（満13歳）上の姉、金緑珠（キム・ノッチュ）は、1910年代半ばパンソリの「国唱」と仰がれた宋萬甲（ソ・マンガップ）が協律社（ヒョンミュルサ）という劇団を率いて金海で公演した際、宋萬甲の弟子を介して紹介され、その才を認められ同劇団へ参加することになる。その後、朝鮮半島に名を馳せるパンソリの名唱として、出身地名を取って呼ぶ習わしから金海金緑珠と謳われる。
紅珠：満5歳	金緑珠と共に舞台デビューか？ その後、金緑珠所属の劇団に入り、父と妹も一緒に巡業生活。
紅珠：満15歳	金緑珠と別れ、父と妹とで釜山へ帰る旅の途中、固城に立ち寄る。そこで父親の決める男性と結婚。固城で芸を教える場所を構え指導に当たり、舞台に出演もする。同年12月妹が固城で病死。
1928年	姉の金緑珠が大邱で死亡。金緑珠の葬列が大邱で行われ、金海から父母と妹（金紅珠）が参列、と記事に有り。
1933年	夫:政治活動で逮捕
1934or5年	夫:釈放
1935年	紅珠：三女を身重の体で、夫に連れられ船で日本の下関へ上陸、日本へ渡ることになる。三女を大阪で出産。
	その後日本の大阪に住み、夫がプロデューサーで金紅珠が看板女優の、朝鮮古典芸能のみの舞台を行う劇団を作る。朝鮮半島への日本の植民地支配が強まる第二次世界大戦最中、朝鮮の民族芸能だけを舞台に乗せる唯一の劇団として、日本全土を隈なく公演する。
1952年	夫：死去。劇団解散。舞台活動からも引退し、金紅珠古典芸術研究所で後輩の指導にあたる。
1998年	金紅珠:数え86歳で永眠（3月18日）

大野一雄 とは

舞踏家。1906年函館に生まれる。体育教師として教鞭をとる傍ら、石井漠、江口隆哉よりモダン・ダンスを学ぶ。兵役による9年間の中断の後、1949年に第1回リサイタル。60年代には、土方巽との共演を行いながら、独自の表現を模索。1977年、青年時代に出会ったスペイン舞踊の舞姫を讃える独舞踏「ラ・アルヘンチーナ頌」を発表し、高い評価を受けた。1980年、第14回ナンシー国際演劇祭で海外デビューを果たし、世界の舞踊界に衝撃を与える。以後、世界各地で公演を行い、「Butoh」を世界に知らしめた。代表作に、「わたしのお母さん」（1981年初演）、「死海」（1985年初演）、「睡蓮」（1987年初演）、「花鳥風月」（1990年初演）、「天道地道」（1995年初演）。詩人、俳人、音楽家など他ジャンルのアーティストとのコラボレーション多数。劇団態変への賛助出演に、「山が動く」（1994年）、「宇宙と遊ぶ」（1996年）。90歳を過ぎても精力的に舞台に立ったが、海外での公演は1999年12月が最後となった。2001年に歩行が困難となってからもその情熱は衰えず、座ったまま手の動きで踊る新たな境地をひらいた。2010年没。



우리 어머니

『ウリ・オモニ』 全5場

1場 暗夜の胎児

2場 母と児の絆

(音楽：伽耶琴散調)

3場 宇宙の種子

4場 満里の僧舞

(幕間：金紅珠の歌

トンベッコ・タリョン)

5場 愛の会話



クアラルンプール公演パンフレット (2016年)

『ウリ・オモニ』 上演歴

1998年8月	エジンバラ	Theatre Workshop	エジンバラフェスティバル・フリンジ '98
1998年11月	大阪	扇町ミュージアムスクエア	扇町ミュージアムスクエア協力公演
1999年7月	東京	タイニイアリス	アリスフェスティバル '99
2000年6月	高知	高知県立美術館ホール	主催：劇団態変を呼ぶ会
2000年6月	ベルリン	フォーラム・シアター・クロイツベルク	
2000年12月	大阪	トリイ・ホール	The 6th Osaka Dance Experience
2002年10月	那覇	パレット市民劇場	うないフェスティバル 2002
2003年10月	台北	Crown Theater	Little Asia dance festival
2004年11月	大阪	Art Theater dB	特別企画「大野一雄 宇宙と花」
2006年1月	クアラルンプール	Kuala Lumpur Performing Arts Center	態変 in Malaysia プロジェクト
2007年11月	大阪	ウイングフィールド	ウイングフィールド 20周年企画
2008年1月	シンガポール	The Arts House	M1 Singapore Fringe Festival 招聘公演
2011年8月	大阪	大阪大学 21世紀懐徳堂スペース	世界演劇学会 2011 大阪大会・特別公演
2015年7月	大阪	メタモルホール	

劇団態変は2019年度新規継続賛助会員を募集しています。

劇団態変は、2012年4月に賛助会員制度を設けました。行政からの補助金を受けず、身体障害者である態変のパフォーマーが主体となり芸術創造活動を行っていくため、資金面でのご協力を市民の皆様をお願いする取り組みです。会員の皆様のおかげによって、様々な企画や稽古の場となるメタモルホールを維持し運営することができています。

現在、2019年賛助会員を募集しております。

年会費

個人会員(年会費) 一口 5,000円

法人会員(年会費) 一口 20,000円

<ご入会方法> 下記いずれかの方法をお選びください。

郵便振替

同封の振替用紙にご記入の上、お振込み下さい。

口座番号 00920-8-320343 加入者名 イマージュ・劇団態変

PayPal

メールアドレスとクレジットカードをお持ちの方はホームページよりご利用いただけます。劇団態変HP → 日本語TOP → 「賛助会員制度」にお入りください。

会員特典

- ・会員証発行
- ・劇団態変公演映像DVD進呈 (当該年の公演ダイジェスト映像)

(個人会員特典)
チケット料金500円割引
(何度でもご利用可能です)

(法人会員特典)
一作品1名様ご招待

《劇団態変出版物ご案内》

情報誌イマージュ VOL.72

最新刊
2018年冬号

クロスオーバー談義 保坂展人×金満里

「なりふり構わず、「分断」を乗り越えよ！」

相模原障害者殺傷事件から2年が過ぎた。この事件を契機として創られた劇団態変の『ニライカナイ 一命の分水嶺』が、2年を経て東京で再演されることを受け、2018年9月29日に、社会連帯フォーラム「相模原事件をあなたは覚えていますか？ 障害者と共に人間の価値を芯から問い直す」が開催された(主催は一般社団法人日本社会連帯機構)。東京公演に向けたプレ企画として、まずは劇団主宰者の金満里と保坂展人世田谷区長が講演。その後、事件が抱える本質的な問題について大いに語り合った。

特集 女の怒り なめたらアカン

女性たちが政治を変える
キネマイマージュ「オランダ」
僕らはどうやって男になるのか 性分化の生物学
他、読み物多数

バックナンバー等詳細は

ホームページ

1冊：500円 / 年間購読 1500円(年3回・送料込) バックナンバー3冊 1000円

<購入方法> 同封の郵便振替用紙にご記入の上、お振込み下さい。単品でのお申込みは希望の号数記入もお忘れなく！

口座番号 00920-8-320343 加入者名 イマージュ・劇団態変



『ウリ・オモニ』

第29回下北沢演劇祭参加

作 金満里 監修 大野一雄 振付 大野慶人

2月8日(金) 19:00★

2月9日(土) 14:00

2月10日(日) 14:00

2月11日(月祝) 14:00

受付は開演の1時間前、開場は30分前

★印の公演後アフタートーク開催

保坂展人(世田谷区長)×金満里

会場 下北沢ザ・スズナリ
東京都世田谷区北沢 1-45-15

チケット 全席自由 ※車いす席のみ各公演3席指定席

[前売] 一般 4000円

障害者・介助者(ザ・スズナリ扱いのみ) 3000円

U22・シルバー(劇団扱いのみ) 3000円

[当日] 4500円

チケット取扱い [1] 電話 ザ・スズナリ tel:03-3469-0511 (11:00～19:00)

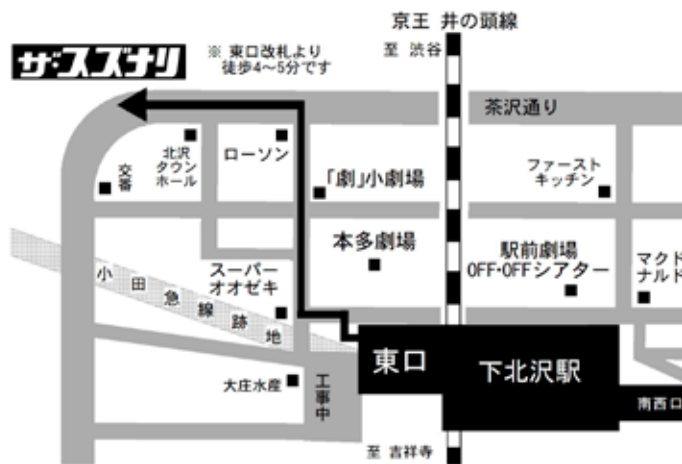
[2] WEB 劇団態変 <http://www.asahi-net.or.jp/~tj2m-snjy/form/ticket3.html>

◎車イスでご来場のお客様へ ◎階段昇降に不安がおありのお客様へ

劇場は歴史的経緯のある建造物で、ご入場には諸々の問題がございます。ご協力をお願い申し上げます。

・横幅が70cm以上の車イスは物理的にご入場不可 ・開演15分前を過ぎての車イスでのご入場は不可

その他、諸条件を必ずザ・スズナリにお問い合わせの上でご予約ください。03-3469-0511 (11:00～19:00)



※現在下北沢駅は工事中です。

12月22日から北口が廃止され、

東口がザ・スズナリへの最寄り口となります。

2019年6月、劇団態変の新作公演決定！

さ迷える愛・破 『箱庭弁当』 6月21日(金)～23日(日) @伊丹AI・HALL

どんな作品になるのか、作者の金満里に聞いてみました。

—不思議なタイトルですが、箱庭弁当って、なんなのでしょう？

(金) 限られた材料、限られた空間で、自分の思いのままに何かを表現する、という箱庭療法ってありますよね。そういう、限られたものの中でかえって発想が駆り立てられる小さい頃の経験というのは、誰もが持っていると思うんです。

子どもが大人へ向かうひとつのステップとして、増殖しないとたまらないような時期、それは限られたところから世界をみて、そこに閉じ込められず宇宙にまで目を向けていくようなイメージ。そういうのを求めるひとつの心理劇を、やりたい。

—「弁当」とはどうつながっていくんですか？

(金) 弁当は、他者、の象徴のような意味合いがあります。子供の時は、他者に作ってもらうもの。また、自分だけで食べるだけでなく、周りの友達に見せたい、とか他者への意識があって、そうするとそこには他者との確執、もめ事、なんかも含まれるわけです。食、をめぐるともめ事が、弁当という世界にはある。

『箱庭弁当』では、子どもから大人への幅広い人間のおかしみやわくわく感を表現し、ちょっと皮肉っぽさもあるような、そんなイメージを描いていきます。

—今回のシリーズについて教えてください。

(金) さ迷える愛シリーズ、「序」の『翠晶の城』では、それぞれの城を壊した先に、人が大河のように転がってどこかへいくんだ、という始まりをやりました。今回はその旅の先に、自己から他者へ向かう一つの突破口を広げ、宇宙に向かってぶちあげていきたいと思っています！

舞台は、ちょっと大掛かりな道具と身体性、で遊びたい。いろんな箱庭や弁当の心理がからくり仕立てて現れ、そこに態変の身体が地面をなめるように展開すると、地球と宇宙という関係が3次元で表現できるんじゃないかと思っています。

三部作の2作目『箱庭弁当』、どうぞお楽しみに！

発行人：関西障害者定期刊行物協会／大阪市天王寺区真田山町2-2 東興ビル4F

ハングル書題字：康秀峰 写真：荒川諒也(表紙) 池上直哉(p5)

編集人(返送先)：イマージュ 金満里 仙城真 七井悠 和田佳子

〒533-0031 大阪市東淀川区西淡路1-15-15

tel/fax 06-6320-0344

e-mail taihen.japan@gmail.com

定価 50円

「ニライカナイ」東京公演Tシャツ
限定販売色：黒地に白色のイラスト
or 白地にオレンジ色のイラスト
(イラスト/メラミキコ)

サイズ：M・GL・GM

※GL、GMは女性のLサイズ、Mサイズ。
MはGLよりも大きいサイズです。

価格：1枚3,000円(送料込み)

お申し込み先：
taihen.japan@gmail.comメールの件名に「Tシャツ注文」
本文にお名前・住所・電話番号・
希望のサイズと色と枚数をご記入下さい。

商品発送時に同封の振込用紙にて代金をお振込ください。商品がなくなり次第、販売終了とさせていただきます。

